陳述書

馬場編成課長が、四十年の十一月、「馬場私案」なる番組編成案を、編成営業制作連絡会議に提出した事情は、次のようなものであつた。

当時の東京12チャンネルは、局再建をめぐり、経営の衝にあたる方々も、また、外部の支援者も、まさに暗中模索の状況にあつた。

たとえば、編成局次長であり編成部長であつた私自身が、競馬予想新聞のスポンサーで競馬予想番組の放送を検討するよう上司から命ぜられたりする一方、当然のこととして、教育局としての筋を通すよう命じられたりする有様だつた。

このような局員達の動揺の甚だしい中で、制作局次長の吉岡正典氏は、おそらく、経営を側面からバックアップする一心からと思うが、現場の管理職たちが、夫々の経験を生かし、紙の立場でいろいろなアイディアを出しあい、真剣に局の再建の道を探りだそうと、編成、営業、制作各部門の管理職連絡会議を提唱され、それによつてこの集りが行なわれたものである。この自由討議の会を開くことについては、吉岡局次長が、局長会の了解をとつたということで、数回ひらかれたと記憶している。

この集りの議題は、当然、局を再建する為にはどのような番組編成にすべきかが中心となり、ずい分極端なアイディアもいくつか披露されたが、第二回の会合で、議論をすすめる意味で、吉岡座長の求めに応じて出されたのが「馬場私案」である。

この私案は、科学局としての番組基準を何とか守りつつ、少しでも視聴率をあげ、営業成績を向上させようという苦心が盛りこまれていて、このような会議で、現場の管理職たちがたたき台の案とするには、かつこうのものと私も思つた。

しかも、馬場課長は、この私案を連絡会で説明する前日、直接の上司である私に示し、連絡会に出すことの了解をとつている。なお、この間の事情は彼もよく知つており、このことは以後、四ケ月半在社し、その後依願退職した私に、これまでどこからも説明を求められたことはない。

従つて、この件について、馬場課長が、その職務権限を逸脱したとは思われず、強いていえば、当時の経営方針をめぐる局内混乱によつて連絡がスムーズにいかなかつた為に、このような誤解が生まれたとしか考えられないのである。

以上

昭和　年　月　日